

日本語を母語としない子どもたちとともに

JSL 日本語指導教育研究会通信

JSL (=Japanese as a second language)

平成30年12月第7号

発行者 会長 熊本 修治

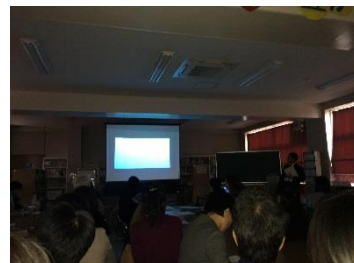
日本語指導教育研究会 事務局

第8回研修会

全体研修1 会場校 春吉中学校の取り組み

・春吉中学校 永山 勇先生

春吉中学校では、配置校日本語指導教室を CCR (Cross-cultural room)、拠点校日本語指導教室を CCC(Cross-cultural center)と名付け、それぞれの日本語教室の運営がなされています。この教室名には、JSL 生徒が日本の文化を理解するだけでなく、日本人の生徒達も外国から来た JSL 生徒達を理解し、認めあえるようにという願いがこめられています。細やかな指導、配慮がなされており、子どもたちが日々先生方の大きな支えで、学習に励んでいると感じました。



○歴史の中で、校名の深い理由が納得できました。日本語指導対象の生徒がそれほど多くない中でも、さまざまな取り組みをしておられることに気づきました。

○課題を5点挙げておられたのがとても参考になりました。JSL 生徒個々に対する指導はケース別に指導を考えていくべきだと思います。

全体研修2 国際理解教育について

・壱岐中学校 自見政子先生 ・内浜小学校 村山あすか先生

国際理解教育について御自身の実践や経験も踏まえてわかりやすくお話しいただきました。JSL 児童生徒本人と保護者に日本の文化、学校のルールを守ってもらうために学校、担任、日本語指導担当教員が具体的にどのようなことができるのか順序立ててお話しいただきました。また、壱岐中学校の実践や生徒達の成長のお話をうかがい、JSL 児童生徒も日本人児童生徒が相互理解をし、高め合い良い学校生活が送れるように、自分たちができることを行おうと気持ちを新たにしました。



○多文化共生について「違いを知る」ということはよく言われることがありますが、お話しの中で、「共通点を知る」という言葉が印象に残りました。日本社会に参画する仲間としてどう協力していくのかという視点に立って生徒の指導をするべきだと考えました。

○これからの日本語指導のあり方について考えさせられました。国の方針や考えが刻々と変化する中でますます日本語指導が重要になってくるので、きちんと流れを把握しておかなければならないと思いました。

全体研修3 教科との統合指導について

・筑紫丘小学校 小田潤子先生

事前に日本語担当教員ひとりひとりが指導案を作り、当日支援のためにつかった教具やプリントなどを持ち寄り、グループごとに良い点と改善点を話し合いました。自らの授業の作り方を客観的に見ることができ、大変有意義な時間になりました。



○指導の工夫について教材に何をを使うか、学んだ内容を実際に使う場面を用意するなど様々な工夫を知ることができました。指導案に書くことで子どもの活動の姿を想像し、どんなところに難しさがあるのかしっかり考えることができたと思います。

○できることを見つけ、自信を持って取り組ませる先生方の工夫にいろいろな気づきがありました。